

Meeting Report



第106回米国癌研究会議(AACR 2015)

AACR Annual Meeting 2015

会期：2015年4月18～22日

会場：Pennsylvania Convention Center(フィラデルフィア)

洪 泰浩

和歌山県立医科大学医学部内科学第三講座講師

はじめに

2015年度の米国癌研究会議(AACR)はフィラデルフィアでの開催であった(写真)。フィラデルフィアは全米第5位の人口を誇り、北米における大都市の1つであるとともに、米国の首都がワシントンD.C.へ移転する直前の首都であったことや、独立宣言が署名された独立記念館があることでも有名である。フィラデルフィア名物のチーズステーキは、名物にうまいものなし(失礼!)の典型例という感じであるが、有名なペンシルベニア大学をはじめとして大学も多く、なかなか魅力的な街であると思う。

近年の本学会について感じる点として、筆者が最初に参加した頃と比べて、年々臨床寄りの演題やセッションが増えていることが挙げられる。後述する pembrolizumab の臨床試験の結果が Plenary Session で発表されたことなどにその傾向が明らかである。もちろん、がん研究の最終ゴールは患者へより良い治療を届けることであり、臨床的意義を重視すること自体は悪いことではない。しかし、そのために基礎的な発表およびセッションの比重が下がることは長期的な見地からは好ましいことではないと考える。

また、本学会においては、自分の専門的な分野に限った

としても、すべての演題を網羅・把握することは物理的に不可能である。とにかくポスターを中心に演題の数は膨大であり、それと並行して口演やシンポジウムがお構いなしに行われているので、自分が見たいもの・聞きたいものを厳選しておく必要がある。

以下に、本学会で筆者が積極的に足を運んだセッションについていくつか紹介したい。

免疫療法

がん薬物療法においては、現在免疫関連の話題が最も注目を集めているが、本学会においてもご多分に漏れず、免疫チェックポイント阻害療法を中心とした免疫療法関連の発表が口演、ポスターともに非常に多くなされていた。なかでも、オープニングの Plenary Session において抗 programmed death-1 (PD-1) 抗体である pembrolizumab による第Ⅲ相臨床試験の発表が行われたのは、本学会においては少し異例のケースであった。本臨床試験は進行悪性黒色腫における、抗 PD-1 抗体である pembrolizumab と抗細胞傷害性 T リンパ球抗原 4 (cytotoxic T-lymphocyte antigen 4; CTLA-4) 抗体である ipilimumab の比較試験であり、結果は全奏効率(ORR)、無増悪生存率(PFS)、全生存率(OS)において pembrolizumab が ipilimumab と比較して有意に優れていたというものであった。また同時に pembrolizumab の投与スケジュールとして、3週ごと投与が2週ごと投与と比較して効果において差がないことも示された。

また、Clinical Trials Plenary Session として免疫療法に特化した“Promising Trials in Immunotherapy”と名前の付いたセッションが設けられており、ここでもやはり会場の雰囲気が米国臨床腫瘍学会(ASCO)さながらの熱気を帯びたものであった。演題のなかではやはり、pembrolizumab の非小細胞肺癌コホートにおける結果が大きなインパクトがあった。免疫組織染色にて programmed death-1 ligand 1 (PD-L1) 陽性細胞が50%以上の症例における ORR は高く、OS においても、症例数は20例と少ないものの、初回治療症例において1年 OS が90%という驚異的な結果であった。



写真 学会会場となった Pennsylvania Convention Center の入り口